

方氏の労作も、労働者による古きものとの対決が十分に描かれず、たとえば労働者大会の決議でその対決過程が代置される様なし方が取られている為、真実の変革過程が生々と印象づけられないうらみがある。

一般に、日本の支配階級が中国の近代的変革を阻止し犠牲に供する事によつて、内在的矛盾を糊塗し自らの資本主義を高度化したという歴史的環境は、兩國の近代社会を密接不可分に關係づけて来た。云い換えると、中日兩國の国民は、日本の支配階級を共通の歴

史的対立者として持つてゐる。それ故に中國の近代的変革は私達の社会の真の變革的近代化―民主化、乃至私達日本国民の真の解放と無關係ではなく、むしろ実践的に相つながら親近性をもつてゐる。この事は、中國の近代的變革が決して、解説や説明であつてはならぬ事を私達に命ずるのである。もし此の観点を欠き、單なる解説に終るなら、まことの中國近代社会を描く事は出来ないであらう。今堀氏は「われわれの生活を規定しているアジアの社会の構造分析は実践的課題の重要さに比して実証的研究のたちおくれが目立つて

いる」と云われるが(本書七四頁)私は逆説めいて恐縮だが、「実証的研究の多いのに比して、実践的課題追究の立ちおくれが目立つてゐる」と云いたい。

もとより、本書を世に問はれた先学とその協力的組織への期待が大きい故の妄言である事を諒解していただきたい。(昭和二十六年五月刀江書院発行A5三三〇頁四〇〇頁)

——里井彦七郎

Raymond Bloch, *L'Ethnologic, problèmes, méthodes et perspectives* (Revue historique, Janvier Mars, 1952.)

エトルスキ人が初期イタリア特にローマの歴史的發展に対して演じたその歴史的重要性は西洋史の概説を学んだものの誰しも等しく認める処である。然るにこのエトルスキ人の起源の問題に関しては未だその決定的学説がなく又この言語は完全な解説の域には達してないものである。本論文はその意味において短い論文であるけれども、エトルスキ人の近

況を知る上に極めて有益なものと考えられる。この論文の執筆者たる Raymond Bloch なる人については詳細な事はわからないけれども、戦後筆者の知るところでは *Les origines de Rome* (Que sais-je? 1946) を書き、又イタリアのエトルスキ学者 Palliuno の *Ethnologia* (Milan 1942) を仏訳した人である。(La civilisation étrusque, P. yot, Paris, 1949. 尙この著書に關しては西洋史学十五輯に私の紹介が出る筈である)

凡そ先史時代或は原史時代の歴史研究は一般にそうである如くにエトルスキ学の發展も言語学と考古学の發展に存在しなければならぬ。特に例えエトルスキ文書が存在してその解説が未だ完全に行われざる現段階においては考古学の發掘の歴史が又エトルスキ学の發展の歴史であると言ふことも出来るであらう。その意味において著者は十八、十九及び二十世紀のエトルスキ学の歴史的發展を素描してゐるが、本論文は 1 エトルスキ人の起源 2 エトルスキ言語 3 エトルスキ文化の三つの部分にわけることが出来るであらう。エトルスキ人の起源については既に古典古

代において Herodote がエトルスキ人をもちつて Tydie の王 Alys の息子の子の一人 Tyrrhenos によつて導かれた人種と云つて Virgilio もそれを支持してゐる。然るに Denys d'Halicarnasse はその文化及び言語の特異性の故にエトルスキ人をもつて既に古くから定住せる土著人であると考へたのである。今日に於てはエトルスキ人の起源には北方起源説、土著説、東方説の三つに分類される。

先づ北方説は古くは Nicolas Fréret, Niebuhr, Müller, 新しくは G. De Sanctis, I. Pareti の主張する處で前者のグループが civilisation des terranars, civilisation villanovienne, civilisation étrusque の文化的發展に完全な連続性を認めるに對して、後者のグループはエトルスキ人とイタリヤ人の間に顯著な人種的相異を認めなければ、エトルスキ人は indo-européens の最近の移住者であると認めるのである。然しエトルスキ人の古名である *Risenna* と *Rhétiens* と云うアルプス人とを同一視する今迄の比較は支持することが出来ず、又 Haut-Adige にエトルスキ碑文が発見されたがその碑文そのも

のは三世紀を溯らぬものである。従つて今日においてはエトルスキ人の起源論に關して定説がないとしても北方説を支持する人は殆んどないこと云つても過言ではないであらう。(然し最近 I. Pareti は更に自己の主張を確実にする爲に La tomba Regolini-Galassi del Gregoriano Brusco dalla civiltà, dell'Italie centrale nel secolo VIac. Cité du Vatican 1947 を發表した)

第二の Denys d'Halicarnasse に發する土著説は Trombetti, G. Devoto, M. Pallottino の如き學者によつて支持されているがこれらの立場の人々は一八八五年エーゲ海の Lemnos 島に、前七世紀か前六世紀の *Mililide* の征服以前の地中海方言でエトルスキ語と極めて近似な性格をもつ碑文が発見されて以來この學説を苦境に陥らしめた。然るにこの土著説はエトルスキ人をもつて Indo-européens のイタリヤ移動以前金石併用期以來既にイタリヤに定住せる地中海人種の殘存者と見做したのである。然し乍ら考古學的立場においては幾何學的な *teivision villanovienne* について《埋葬》或は新しい建築

様式が現われ、又東方からの輸入品やその模倣品及びエーゲ海的な武器が出現したことは特筆すべきことである。金石併用期以來それ程顯著な文化的活動を営まなかつた所謂エトルスキ人が *civilisation villanovienne* の後に突然あの様な輝かしい文明をどうして開花せしめることが出来るであらうか。

然るに Herodote 以來第三の東方説は、古典的伝説と言語學的研究或は考古學的研究の成果が殆んど一致してゐるのである。尙この學説を支持する論拠としてアジアのある地方における如く婦人の地位の高き事、クレト・ミネケナイ的な《*tride*》の祭祀、或は東方的な神意探求法はすべてエトルスキ人の東方よりの移動を示す (Pallottino, *Civilisation étrusque*, p. 60 seq. と比較されたい)

以上がエトルスキ起源論の分類と論者 Raymond Bloch の立場の説明である。勿論アジアからの移動者は極めて少数ではあつたが、それにも拘らずエトルリアの支配者階級を構成し土著民は被征服者として彼等の支配下にあつた。彼等エトルスキ人は同時に輝かしい東方の文明をイタリヤにもたらし、ロー

マが全イタリヤを征服する以前に少くともイタリヤの半分を文化的に統一しローマの発展の基礎を準備したのである。

次にエトルスキ語であるが、この研究分野は非常に多くの努力にも拘らずその成果は極めて微々たるものであり、多くの研究者をして失望落胆せしめる一つの神秘である。現在利用し得る資料は極めて少く最も長文のものは *Zagreb* の博物館にある、ギリシアローマ時代に属するエジプトの木乃伊を包んだ麻製の紐であるがそれに含まれている単語は全部で一五〇〇語、その内全く異つたものは僅かに五〇〇語程度しか存在しないのである。

尙この外に若干資料は存在するけれどもそれら全体を集めても殆んど一〇〇〇語程度である。しかも祈禱や葬式に関するものが多いのである。又ラテン語やギリシア語の文獻の中にエトルスキ語の解説したものも存在するがその数は非常に限られている。従つて *Pierre de Postolle* の如き *«le»* が現れざる現状においてはエトルスキ語の解説は益々困難と云われねばならぬ。この様にエトルスキ語の解説は極めて困難な状態にあるにも拘ら

ず、その文字の解説は容易で、エトルスキ文字はギリシア語が東西の方言に分裂する以前のギリシア人から借りたと云ふ事に関しては大体意見が一致している様である。又一方エトルスキ語の解説の為に二つの方法が採られている。その一つはエトルスキ語と多少とも近親性のある言語を比較研究する方法で、この比較が全く仮定の上に立つている故にその結論は極めて危険性の強いものである。それに対して他の一つは *Palatino* の表現をすれば *la methode «de combinaison»* と呼ばれるもので、エトルスキ碑文の相互の分析比較或いは名詞の意味、音価、機能を明らかにする事に依つてエトルスキ語自身でエトルスキ語を解説して行こうとする立場である。この方法は極めて地味ではあるがその結論は確實である。

この様にして今日達した結果に依ればエトルスキ語の中に *Langue Prindo-européenne et méditerranéenne* を認める事が出来る故にアナトリア地方の方言の研究の成果に期待すること極めて大きいのである。

この様にしてエトルスキ人の起源、或いは

エトルスキ語の解説の領域に於て決定的な結論を得る事が出来ないといふればエトルスキ語の価値に対して疑問を抱く人々が現われるのも当然であらう。しかしエトルスキ語の領域は単にこれら二つの部門に限られているのではない。なる程これら二つの部門が明らかにされる事に依つてエトルスキ文明の全貌が明らかになるかも知れないがそれらの問題が充分に解決される事なくともエトルスキ人の歴史、宗教、芸術を考古学的研究或はギリシアやラテンの歴史家或は文字者に依つて知る事が出来るのである。今エトルスキ人のローマ史の発展に及ぼした影響を示めそう。ローマは前七世紀から前六世紀の中頃迄にエトルスキ人の強力な影響によつて前五五〇年頃に本當のエトルスキの都市となり、前四八〇年頃迄その状態を続けたのである。従つてローマ王政の全体を支持する事は出来ないけれども *Tarquins* の伝説は正しいものであり、又他のエトルスキの都市の如くに城壁に囲まれた事が明らかとなつた。それ故にローマの都市は最初からローマ人の主導の下に建設されたのではなく、エトルスキ人と云う征服者の手

に依つて建設せられたと云ふ事が今日では、エトルスキ学上の常識となりつつあるのである。又宗教史に於いてもエトルスキ的なデーモンの世界支配の思想が前一世紀に *Incerte* が *De Remm Natura* を著わす迄ローマ人の宗教意識に大きな影響を及ぼしていた事が明らかになされたのである。更に芸術の面に於いても今迄エトルスキ芸術の最後の製作は前一世紀に置かれていたが、その多くのあるものが *époque constantinienne* 迄降ろることが証明された。(M. Ragna Enking, *Datierung und Matine der spätetruskischen Kunst, Jahrbuch des deutschen arch. Instituts, 63-64 an. 1948-1949, col 183 a 237*)

かくしてエトルスキ芸術の影輝はローマによる征服及び政治的統一の後にも尚イタリアの地に存続したことに對し我々は改めてエトルスキ文明の強大性に就いて深き反省をなす必要があるであらう。

以上が本論文の大体の内容紹介であるが最後に私の読後感を述べて置かせて戴くならばこれは確かにエトルスキ学の現況を知るには極めて要を得た論文である。しかし Raymond

Bloch が仏訳した Pallottino の著書には Bloch が支持する東方説を逐次批判しているのである。この小論文をもつては到底不可能であらうが他日彼の Pallottino の批判を知らんと欲するのは私一人ではないであらう。Pallottino 的な土著説に Bloch 的東方説が最も対立的な見解であるとするならば今後のエトルスキ史学の鍵の一つは *civilisation villanovienne* から *civilisation étrusque* への転換を Pallottino の如くに内部的な連続的發展と見るか或は Bloch の如くに外的変革と見るかに依つてエトルスキ人の起源論が決定されるであらう。尙一応お詫びしておかなければならぬ事はこの紹介は時間的に余裕がなく非常な吝嗇のうちに出来上つたものなる故に大きな誤謬或は曲解を犯してはせぬかと恐れるのである読者諸氏の批判を期待する次第である。

—— 渡香 正 ——

小林行雄著

### 日本考古学概説

日本考古学は近年著しい進歩を遂げて来

た。しかしながら、その成果が、必ずしも一般によく知られ、利用されているとは言えない。その原因の一つとしては、戦争中から戦後に互る困難な事情のために、學術的に重要な発掘が行われても、その報告書の出版が遅れがちであることが挙げられよう。これとともに、著しく拡大された知識を、適確にまとめ上げた概説書が殆ど現われなかつたことも、先づ指摘されねばならぬであらう。この後者の要望に答えうるものとして、本書の持つ意義は大きく評価されねばならない。

次に注意されねばならぬのは、その「はしがき」にも述べられているように、遺物の記述に力を用いていた過去の概説書とは異つた行き方の採用である。即ち「遺物研究の学問から人類の過去を研究する学問への方向に、より近づけよう」とする企てであつて、これは広義の歴史学の一分野として考古学を責識する場合、当然の方向と言わねばならぬ。

かかる方向の下に、繩文式・彌生式・古墳

の三時代の概説が進められるわけであるが、

その記述に當つては、「序章において各時代の

の総説を三者の対比のうちに進め、住居・生